

巻頭言

2つの大学生の声から

中森 一郎 ((一財) 全国大学生協連奨学財団 専務理事 / 全国大学生生活協同組合連合会 専務理事)

「生協の食堂は栄養バランスを重視し、かつお腹がいっぱいになるまで食べようと思うとかなりの金額になり、ファミレスや弁当屋さんで食べた方が安くつくのが不満です。(中略)もう少し安くして欲しいです。」(京都府 / 国公立 / 文系 2 年 / 自宅外)

これは、第 60 回 大学生生活実態調査に回答した学生の自由記入欄のコメントである。このコメントは現在の大学生協食堂を考えるにあたっての核心をついている。

確かに最近の生協食堂は「高く」なった。私の生協食堂歴は 1989 年からだが、これまでその「安さ」の恩恵にあずかっていた。土曜日に子連れ出勤し、昼食は「何をどれだけ食べてもいいよ！」と大見得を切っても、せいぜい 500 円を超えるくらい。大学の同期には今でも生協食堂を使えることを自慢していた。

ところが原材料等の高騰、人件費の上昇を背景に、大学生協食堂は急速な価格対応を余儀なくされている。今子どもを連れて行ったら、おそらく 700 円に迫るだろう。組合員からこのような声をいただくことは、大学生協の経営を預かる身としては忸怩たる思いである。

しかし一方で、やはり生協食堂は「栄養バランス」「お腹いっぱい」を組合員に期待される存在なのである。我々は経営力量を上げて、また組合員との対話や協同を通じてこの期待にどう応えるのか。単に「しょうがないよ、他も上がっているんだから」と割り切るだけの問題ではないように感じている。

「親が亡くなり、精神的にも経済的にも不安定な状況が続いていたため、大学院を退学することも検討しておりましたが、そのような中で

この制度を知り、諦めずに頑張ってみようという気持ちになれました。今を何とか乗り切り、私も将来同じような境遇の学生を支援できるようにになりたいと思います。」(北海道大学 院生)

これは、当財団が運営する「たすけあい奨学金」を受給した大学生の声である。この制度は、扶養者死亡という家計急変の危機に直面した大学生に対し、組合員からの寄付や、団体・個人賛助会員からいただいた賛助会費を原資として、返済不要の 12 万円の緊急奨学金を給付するものである。毎年約 400 人の受給者からの感謝の声を頂戴しているが、その声に共通しているのは「一時は途方に暮れたこと(経済的にも、精神的にも)」「『退学』が頭にちらついたこと」「周囲からの支えを実感したこと」「いつか自分も『支える側』になりたいということ」である。加えて貸与型奨学金受給者においては、その返済への不安がさらにのしかかる。

※奨学金問題については、「生活協同組合研究」2025 年 4 月号にも拙稿(学費・奨学金問題の『リアル』を考える)をしたためたので、こちらもご参照ください。

今後も物価高騰を巡る問題は大学生のくらしに影響を及ぼすだろう。協同組合人としてこの問題をどう考えるのか、そして対話と協同を通じて大学生とどのような関係を築いていくのか、私も今号を通じて考えたい。

※「たすけあい奨学制度」では、皆様からの寄付や賛助を通じたご協力をお願いしています。詳細は以下の web サイトをごらんください。

